

聖書:ホセア書14章1～9節

説教:あなたの神、主に立ち返れ

はじめに

ホセアが預言者として召されたのは紀元前760年だといわれます。その頃の北イスラエルは、この世の事で言えば、すぐ隣の大国アッシリアご機嫌をうかがいながら目の前の平和を楽しんでいた時代でした。そして宗教的なことで言えば、主を捨ててバアルと呼ばれる偶像を拝んでいた時代でもあった。そこでホセアは、主を捨てた北イスラエルの罪を徹底的に責め、いますぐ主に立ち返れと叫び続けます。今日はそのホセア書の最後のところを開いています。ここには神がどのように私たちを救って下さるのか、大切なポイントがまとめられています。ポイントは三つです。一つ目は、私たちは神に対して罪を犯してきたのだという確認。二つ目は、そのような罪人はどのようにしたら主に立ち返ることができるのか。三つ目は、主に立ち返ったとき神はどのようにしてくださるのか。この三つを見てまいります。

1 何をしたのか

1) 自分の不義につまずいて背く者となった

今三つ挙げましたが、これは医者が患者を治療する話とよく似ている。たとえば家族を病院に連れて行こうとしても、本人が「おれは病人ではない。健康だ」と言い張っていたらなにもできない。それでまずなにをするかといえば、私たちは健康なのか病人なのか、その確認から始まるわけです。それが1節後半にある。「あなたは自分の不義につまずいたのだ。」同じような表現は9節の最後にもある。「背く者はこれにつまずく。」

高齢の方にとって、道を歩いていたり階段を上り下りしてつまずいて転んだりしたらいのちに関わることさえあります。それと同じように、聖書ではつまずくということがいのちに関わってくる。さて問題は、いったい何につまずいたのかです。

2) 主の道は平らなのに

山登りをしていて大きな石につまずくとか、木の根っこに足をひっかけてつまずくことがあります。ところが険しい山道を歩いていつまずいたのではなく、9節にあるように「主の道は平ら」なので、つまずくような大きな石もないし木の根っこもない。そんな道だということです。それなのにどうしてつまずくのか。主の道からそれて、自分から進んで

石ころだらけの道を歩いたから。具体的にはこうです。最初は主の道を歩いた。ところがあるときふとわきを見たら、バアルの神々の道が見えた。それが実に魅力的で、あそこの道を歩いたら、おいしいものは食べられるし、きれいな服は着られる。楽しく平和に暮らせる。そんなふうに思えたので、主の道を歩くのをやめて、バアルの道のほうを歩きはじめた。

3) 剣に倒れる日

そのまま幸せに暮らしましたというのなら、このような聖書は書かれなかったでしょう。ところがこの後、大変なことが起きるのです。ホセアが「主に立ち返れ」と叫んだときから数えてわずか十数年後のことですが、アッシリアが攻めてきて北イスラエルはあっというまに滅んでしまう。そのときの光景は、13章16節にある。「彼らは剣に倒れ、幼子たちは八つ裂きにされ、妊婦たちは切り裂かれる。」この世の地獄のような光景が目にすることになる。

2 悔い改める

1) ことばを用意する

こうなったらもう手遅れです。どうすることもできません。絶望するしかない。ところがそんな真つ暗闇の中に突き落とされたとき、主はこう言われる。2節前半。「あなたがたはことばを用意し、主に立ち返れ。」絶望してはいけない。まだ望みがある。主に立ち返って、もとの歩いてきた道に戻ってきなさい、と言われる。そのとき一つだけ条件がある。あなたがたはことばを用意しなさいということです。いったいどんなことばを用意するのでしょうか。これも主が教えてくださる。2節後半から3節。「すべての不義を赦し、良きものを受け入れてください。私たちは唇の果実をささげます。アッシリアは私たちを救えません。私たちはもう馬に乗らず、自分たちの手で造った物に『私たちの神』と言いません。みなしごがあわれまれるのは、あなたによってです。」

2) 唇の果実をささげる

ここでは不義ということばがあります。先ほどみなさんと祈った主の祈りの、「私たちの負い目をお赦しください」というところの「負い目」と同

じ。主の道からはずれて罪を犯した者だと認める。すべてはそこから始まります。そんな告白が、「唇の果実」なのだというのです。アッシリアは自分たちの味方となってくれると思っていたけれど間違いでした。石を刻んだものを「私たちの神」だと呼んでいましたが、それらはただの石に過ぎず、なんの役にも立たない空しいものを拝んでいました。私たちはみなしごのようになってしまった。こんなことになったのも自分たちが愚かだったためでした。でも私たちにはどうすることもできません。あなたがあわれんでくださるのを願うしかない。このような告白です。

病気の治療で言えば、患者が自分は治療が必要な病人ですと自覚するということです。これが唇の果実だということです。

3 神の赦し

1) 彼らを愛する

さて、このようにして私たちが唇の果実をささげたならば、神はどうなさるのでしょうか。たとえば13章8節にこんな言葉がありました「(わたしは、)子を奪われた雌熊のように彼らに襲いかかり、彼らの胸をかき裂いて、その場で雌獅子のように食らう。」主に立ち返ろうとしたら、こんな恐ろしいことが待っているなら、だれも戻れません。もちろんそんなことはない。4節に「わたしの怒りが彼らから離れ去った」とあります。私たちに襲いかかるのではなく、むしろ「喜びをもって彼らを愛」して下さる。悪の限りを尽くすようなどんなひどいことをしたとしても、その人が主に立ち返るならば、神は喜んで迎えて下さり、愛して下さるといわれる。それだけではない。何もかも失った私たちに根を張らせ、枝を伸ばし、花を咲かせ、実を実らせ、その輝きと名声は他の国々にも響き渡っていく。それほどのことをしてく下さると約束します。

2) 背信を癒やす

これを聞けば胸をなで下ろして安心できます。でもそこで終わってよいのか。私たちには思い出すべきことがあるのではないのでしょうか。4節の最初にこうあります。「わたしは彼らの背信を癒やす。」「癒やす」とは病気を治すことです。背信、あるいは不義、それらはすべて罪と呼ばれるものですが、神の目にはそれらは深刻な病の状態と見えています。罪という病気を癒やさなければならぬ。もし治さなかったら滅んでしまうから。でも、どのようにして癒してくださるのでしょうか。

マルコの福音書に、四人の人に担がれて来た中風の人の話があります。中風ですから歩くことはもちろん、話すこともできない。しかしかわいそうに思った近所の人たちはこの人を担架に乗せて、イエスのところに連れて来ようとした。ところが大勢人たちが家の中にいたので、近づくことができない。そこでこの四人は屋上に上り、屋根をはがして中風の人が寝ている担架をイエスの前につり降ろしたというのです。これをご覧になっていたイエスは「子よ、あなたの罪は赦された」と宣言し、「あなたに言う、起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい」と言われると、中風の人はすぐにそうしたというのです。これを見てもわかるように、主が「あなたの罪は赦された」と言うひとことで私たちの罪は赦されます。

でもそこで終わりではない。「あなたの罪や赦された」と言われた主は、私たちの罪を背負って下さったということでもあるのです。このようにして私たちの罪を背負われた主が十字架で、身代わりとなってさばきを受けられた。もし十字架がなかったなら、だれひとり罪は赦されなかった。私たちの罪が赦されているのは、主が十字架でさばきを受けて下さったからです。「わたしは彼らの背信を癒やす。」ここに、主の十字架があります。神の背き、不義につまずいた人々を救うために主がいのちを捨てて下さるのだと言っているのです。

3) 本当の知恵と悟り

この世界には本当に頭のよい人たちがいて、人はどうしたら幸せになれるのかというような本を書いています。そんな本を読むと、自分も一つ知恵がついて頭がよくなったかと思ひ込むことがある。けれども聖書によれば、人が考え出した智恵や悟りは結局何の助けにもならない。私たちが本当の幸せを得るための知恵というのは、一つしかない。「主の道は平らだ。正しいものはこれを歩み、背く者はこれにつまずく。」これが私たちの知るべき本当の知恵であると言うのです。

これを聞いてどう思いますか。険しい山道を登らなければ幸せになれない、と言っているのではない。厳しい修行をせよとか、こまかな決まり事を守らなければ救われれないと言っているのではない。主の道は平らで、だれでも歩ける。そんな道を歩けばよい。一体どうやったらその道を歩けるのか。繰り返します。唇の果実をささげる。これだけです。

このような道を備えてくださった主の十字架を仰ぎ見ながら歩いていきたいと願います。

